第7章 レイチェル

01 — 手の仕草を覚えていた女

レイチェルは、クロノスが聞きたいと言うまで、彼の前でダニエル・リードの名を口にしないよう気をつけていた。今、少年は独立資料庫の何も置かれていない窓辺に立ち、洪水で水のあふれた土手道を朝の車がのろのろ進むのを見ながら、もう一度尋ねた。

「知っていたころ、どんな人だったか教えて」

「当時の彼は謎なんかじゃなかったわ」とレイチェル。「セバスチャンが失敗した培養組織を捨てられないから、夜勤を引き受けていた、疲れ切った若い科学者だった」

彼女が最初に思い出したのは、ありふれた仕草だった。両手に試料のトレーを抱えたダニエルが、手首の甲で扉を押さえている。研究会議の記憶は明るく輪郭の曖昧な部屋の連続になっているのに、その小さな仕草だけが鮮明に残っていることが、彼女には腹立たしかった。

「人が答え終わるまで待つ人だった。タイレル社では、それは珍しかったの」

「好きだった？」

「仕事では信頼していたわ。仕事以外のことでも、ときどき」

クロノスは小さな自分の手を見た。覚えている動作がどこに収まるか試すように、片方の手首を握った。「僕もそうする？」

「ときどきね。でも証拠にはならないわ」

「分かってる」。少年は落胆しているようには聞こえなかった。「あなたが気づいていたか、知りたかったんだ」

ロイは監督しているように見えない距離を保ちつつ会話が聞こえる扉の近くにいた。そこにいてほしいと頼んだのはレイチェルだった。少年を恐れているからではない。証人もいない部屋で、二人だけが互いの正体を決めることを期待される状況を、もう信用していなかったからだ。

02 — セバスチャンの二冊目のノート

エイドリアンが独立証拠保管庫からノートを運んできた。切れたゴムバンドの付いた小さな紙の台帳で、数十年前にJ・F・セバスチャンの放棄された研究用品として目録に登録されていた。裁判所は技術的な注釈を読むことを許したが、綴じられたページを取り外すことは禁じていた。

筆跡は途中で変わる。セバスチャンの詰まった数字が、ダニエルのゆったりした文字に代わっていた。繰り返し複写処理にさらさ

れた生きた神経組織の修復手順を記録していたのだ。不死を実現する処方箋ではない。医師がまだ救えるものを見極めるまで、損傷を負った人間の状態を安定させる方法だった。

「機能から連続性を認証することはできない」とセバスチャンが余白に記していた。

その下のダニエルの返答は短かった。「なら認証するな。本人に聞け」

レイチェルはこのやり取りを知っていた。セバスチャンが最初に口にしたとき、彼女も居合わせたのだ。再構成された動物が学習済みの命令をすべて実行しながら、親しんだ飼育係には近寄らなくなった実験の後だった。研究室は転送成功を祝ったが、セバスチャンだけは祝わなかった。

「その実験に関わっていたの？」とクロノス。

「いいえ。見ていたの。そして成功だと言う人たちを、信じるべきでないほど長く信じてしまった」

ノートにはレイチェルが校正作業の立会人として記されていたが、患者でも神経組織の提供者でもなかった。その区別は彼女にとって重要だった。どの記憶が自分のもので、どれが選んで与えられたもので、どれが数に入らないのか、長年他人から教えられてきたからだ。すべての秘密の中心に自分を据えるものであっても、都合よく整理された新しい答えを彼女は拒んだ。

03 — 判定を伴わない認識

資料庫の再生室には、機械式の読取装置を必要とする音声円筒が保管されていた。ヌルは装置が外部と接続されていないことを確認した。独立した二人の技師が封印を検査し、再生するかどうかをクロノス自身に決めてもらった。

少年はうなずいた。

雑音、椅子の擦れる音、そして男の声が流れた。ラベルによればダニエル・リード。移植された神経網が誤った刺激パターンに反応し始めた思春期の被験者について話していた。その声は軍に記録されたクロノスの声より若い。しかし、あるためらいがちな言い回しのリズムを聞いた瞬間、レイチェルは息をのんだ。

「何を覚えているかを教えるな。何を失うことに耐えられるか、本人に聞け」

クロノスは自分で再生を止めた。

「僕の声も、あんなふう？」と聞いた。

「まったく同じではないわ。でも難しい言葉の前に置く間は似ている」

ロイが近づいた。「複製された声なら、その間も複製できる」

「うん」とクロノス。「育ててくれた人の間の取り方を覚えることもできる」

どちらの可能性も、彼が短い公的な人生を通じて押し付けられてきた判定にはならない。レイチェルは、自分が覚えている青年を、似ているからといってその過去を要求しないでほしいと勇気をもって伝えようとする少年の中に探していたことに気づいた。

彼女は円筒を裏返した。古い日付が消され、後の日付に書き換えられていた。新たな録音ではなく、移管の記録だ。誰かが研究終了後も長い年月、この短い会話を保存していた。

04 — ガラスの向こうの人

彼らは移管台帳を調べるため、現存する治療病棟へ戻った。観察窓の向こうは、ありふれた病室だった。レイチェルは事故の後、ダニエルを見舞ったことを思い出した。モニターに囲まれた身体の片側はほとんど反応せず、もう片側は彼の信号を学習しなければならない生体移植組織に支えられていた。

「街がどんな匂いか、聞かれたの」と彼女はクロノスに話した。「何日もフィルターが動いていて、誰も窓を開けてくれないことに我慢できなかったのね」

「開けてあげた？」

「いいえ。感染管理上、許されなかった。代わりに雨水を含ませた布を持っていったわ」

当時は愚かな仕草だと思った。彼は何も言わず、その布を握っていた。長い間、その沈黙は感謝だと考えていた。だが今は、救助

者を名乗る人々に窓を開ける自由を拒まれて、怒っていたのかもしれないと思う。

技師の注記から、ダニエルが神経組織の全面的な置換を二度拒み、その後に限定的な修復へ同意したことが分かった。一度目の拒否は紙に残されていたが、二度目は裏付けのない事務上の要約にしかなかった。後に誰かが双方をまとめ、《治療受諾》という文言に変えていた。

「こうやって起きたのね」とレイチェルは静かに言った。「紙の上で選択を小さくして、最初から選択などなかったようにしてしまう」

クロノスは冷たいガラスに手を当てた。「生きられたことに感謝しながら、怒っていてもいいんだ」

「ええ」

「そのとき選んだことを、後から違うと思ってもいい」

「ええ」

「僕が今生きていることを喜んでも、彼らがダニエルにしたことを認めなくていいんだ」

レイチェルはすぐに答えられなかった。少年はどんな法廷よりも慎重に、その真実を口にした。

05 — 古い約束

エイドリアンは同じ証拠保管袋の中から、ダニエルの筆跡でレイチェル宛てに書かれた手紙を見つけた。封は開かれていなかったが、封書の指示は開示命令に置き換わっていた。独立審査委員会は彼女に、私的に読むか、開封を拒むかを選ばせた。レイチェルはクロノスのいる前で読むことを選んだ。

ダニエルが書いたのは最初の置換手術の後で、ヘリックス社がまだ彼を《基盤》と呼び始める前だった。タイレル社を辞めるとき、別れを告げなかったことを謝っていた。セバスチャンの衰える健康、研究助手たちの目立たない働き、そして効率的な会議を台無しにするレイチェルの質問癖にも触れていた。

最後に願いがあった。自分が後の処置を拒めない状態になっても、それまで実際に残した指示を超えて、自分の意思が分かると主張しないでほしい。友情は、未来の見知らぬ誰かに対する代理決定権ではない、と。

レイチェルは紙を一度折った。「もう彼に返事をする機会は失ったと思っていた」

「今からでも答えられるよ」とクロノス。

「誰に？」

「聞いている誰かに。先に誰なのか決めなくてもいい」

彼女はロイを見た。彼にはその提案の代償が分かっていた。大切な人は誰も本当には死んでいなかったと少年を証明に使う、その

慰めを手放すことになる。一方で、ダニエルの想像もしなかった人物へと成長する余地を少年に残す。

「では、これが私の返事」と彼女は言った。「彼の歴史を、あなたの選択を奪う許可には使わせない」

クロノスはゆっくり息を吸った。「ありがとう」

06 — 拒否することの代償

午後になると、審査委員会にヘリックス社の承継信託から申立書が届いた。回収された治療記録は企業秘密であり、患者の同意台帳を開示すれば重要な身体再建技術が漏れるという。申立書は同時に、所有権の決定まで《クロノス》と指定された少年を一時保護下に置くよう求めていた。

レイチェルは二度読んだ。怒りを隠さなかった。「何も学んでいないのね」

「丁寧な言葉を使うことは覚えた」とロイが言った。

委員会は即時の保護要請を拒否した。企業に対し、商業上の機密となる数式と、本人が同意したかどうかの記録を区別するよう命じた。法的な争点は狭かったが、実際の影響は大きい。記録が審査されるあいだ、クロノスは自分が選んだ場所にとどまることができた。

企業の代理人が公式回線からレイチェルに連絡し、ダニエルの手紙を引き渡すなら申立てを取り下げると申し出た。彼女は証拠への干渉の疑いがあるとして、その提案を記録に残すよう求めた。通信は切れた。

封印された記録を見つめていたクロノスが言った。「写しを渡すこともできたのに」

「できたわ」とレイチェル。「でも、私に真実を話してほしい人はみんな、静かな午後と引き換えに私が買収されると知ることになる」

「僕は戦ってほしいなんて頼んでない」

「分かってる。ここからは私自身の選択よ」

少年は初めて、彼の選択を守ることと彼女が自分の選択を手放すことは同じではないと理解したようだった。

07 — 彼女が与えられなかったもの

その夕方、レイチェルとクロノスは古い換気塔の屋根の下で、雨に滲む街灯を眺めていた。事故前にダニエルに最後に会ったときのことを覚えているかと、少年は聞いた。

「九分だけの昼食だった」と彼女。「彼はもうヘリックス社の誘いを受けていた。特許は患者の拒否権より長く存続してよいのかと、言い争ったの」

「どっちが勝った？」

「誰も。彼はコーヒーを飲み残して出ていった」

クロノスはかすかに笑った。「僕はコーヒーが嫌いだよ」

「気づいていたわ」

「それって、僕がダニエルじゃない証拠かも」

「単にコーヒーの嫌いな子供だという証拠かもしれないわね」

少年は真顔になった。「僕が彼のことを全部覚えていたら、うれしい？」

レイチェルはいつかそう聞かれると思い、慎重な答えをいくつも考えていた。しかし、どれも十分に正直ではなかった。「一部の私はそう思う」と認めた。「昔の友達に戻ってきてほしいと願う部分がある。でもそれは私が背負うこと。あなたが返す借りじゃないわ」

クロノスの肩から力が抜けた。「窓を開けた記憶がある。雨水の布じゃなくて、本当の窓。誰もいない病室で、開けちゃいけないと分かっていた」

「ダニエルがしたことかもしれない。記録で見たことかもしれない。誰も書き留めなかったことかもしれない」

「どれか決めずに調べられる？」

「ええ」

雨脚が強くなるまで二人はそこにいた。再会とは呼ばなかった。だからといって何もなかったことにする必要もなかった。

08 — 消えた十二分間

真夜中、ヌルは音声円筒の保管記録の日付と、軍の別館に残る停止記録の照合を終えた。大半の食い違いは予測できるものだった。ずれた時計、遅れて作られた写し、別の束に誤って添付された署名。しかし一つだけ異なる不一致があった。

軍がクロノスの停止を記録した日、病棟の物理記録装置から十二分間が失われていた。そのあいだも装置への給電は安定し、機械式カウンターも進んでいた。デジタルで上書きされたのではない。対応する記録媒体の帯が、人の手で抜き取られていた。

レイチェルは証拠写真を調べた。切断面は正確できれいだった。施錠された筐体の内側から行われている。

「彼が生き延びた証明か？」とロイが尋ねた。

「いいえ」と彼女。「誰かが十二分間の証拠を取り除いた証拠よ」

クロノスは最後に残った映像を見た。ガラスの反射に二人が映っていた。制服の技師と、ベッドのそばに立つ小柄な誰かだ。顔は見えない。子供かもしれず、角度によって小さく映った反射かも

しれない。あるいは停止記録より前に運び込まれた別の身体かもしれなかった。

「まだ物語にしないで」とクロノスが言った。

レイチェルは写真を置いた。少年が今日彼女から学んだ言葉であり、ダニエルから継承したものではなかった。それは資料庫のどんな類似の証拠よりも、彼女に希望を与えた。

封印された証拠は独立審査委員会に送られる。失われた十二分間に何が隠され、誰がそれを取り除く権限を持っていたのか、そこから問い直すのだ。答えが出る前から少年を所有物や帰還した男と決めつけることは、誰にも許されない。

眠る前、クロノスは証人書類に自分の名を書いた。軍が与えた名を、今の自分の手で。

《CHRONOS》

窓の外では、雨が遠くの塔を覆い隠していた。失われた十二分間の向こうに、停止した身体の真実がある。次の問いは、誰がその停止を命じ、命令が正確には何に届いたのか、だった。